

陶器南遺跡発掘調査概要・VI

— 府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査 —

1999.3

大阪府教育委員会

は し が き

堺市陶器北、上之地区は、堺市東南部に広がる泉北丘陵上にあります。泉北丘陵は、泉北ニュータウン開発やその周辺地域の開発によって、現在都市化が進みつつありますが、このなかで陶器北、上之地区には田園地帯が広がり、古くからの地形などが良く残されています。

また、泉北丘陵は、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の生産地であった陶器窯跡群があることでも知られています。陶器北、上之地区は、陶器窯跡群のすぐ北側にあたり、陶器南遺跡の範囲に含まれています。この遺跡は、「陶器」という地名や、周辺に須恵器窯跡、陶器千塚古墳群、延喜式内社「陶荒田神社」などの須恵器生産に関連すると思われる遺跡や神社があることなどから、陶器窯跡群と密接な関係をもった遺跡と考えられます。

大阪府教育委員会では、府営ほ場整備事業「陶器北地区」の実施に伴い、平成3年度から陶器千塚古墳群の発掘調査を、また、平成5年度から陶器南遺跡の発掘調査を継続して実施しております。既往の調査では、古墳の周濠や、古墳時代、奈良時代の須恵器生産に関連したと思われる人々の集落跡、中世の居館跡や土地の開発状況を確認することができました。

今年度の調査においても、一昨年の調査に引き続いて中世の集落跡を調査し、古墳時代から中世にかけて集落が位置を移しながら変遷していくことを再確認することができました。

今回の調査に際してご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係各位、諸機関に厚く感謝いたしますとともに、今後とも大阪府における文化財保護行政に対する、一層のご理解とご支援をお願いいたします。

平成11年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野 一 美

例 言

1. 本書は、平成10年度に実施した、府営ほ場整備事業「陶器北地区」予定地内、堺市陶器北、上之に所在する陶器南遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府環境農林水産部より依頼を受け、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が実施した。
3. 現地調査は、調査第1係技師 竹原 伸次を担当者として、平成10年6月10日に着手し、平成11年3月31日に終了した。
4. 現地調査にあたっては、大阪府泉州農と緑の総合事務所、堺市教育委員会及び地元関係各位の御協力を得た。記して感謝の意を表します。
5. 本書の執筆、編集は竹原が行なった。

本 文 目 次

はしがき

例 言

第1章 調査に至る経過と方法

第1節 調査に至る経過..... 1

第2節 調査方法..... 2

第2章 調査結果

第1節 1区..... 3

第2節 2区..... 9

第3節 3区..... 13

第4節 4区..... 20

第5節 5区..... 20

第6節 6区..... 27

第3章 まとめ..... 30

報告書抄録

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

堺市陶器北、上之に所在する陶器南遺跡は、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の生産地であった陶邑窯跡群のすぐ北に隣接している。南東から北西に舌状に伸びる丘陵の先端部に位置する。

大阪府教育委員会では、府営ほ場整備事業「陶器北地区」の実施に伴い、計画地内に存在する陶器千塚古墳群の調査を平成3年から5年にかけて実施し、平成5年から今年度にかけては、陶器南遺跡の調査を実施している。この結果、陶器千塚古墳群の調査では、削平された多くの古墳の周濠を発見し、この地域に「千塚」と呼ばれるほど多数の古墳が存在していたことを確認することができた。

陶器南遺跡の調査では、遺跡の南側にある延喜式内社「陶荒田神社」から北に伸びる道路の西側から、古墳時代・奈良時代の須恵器生産に関連したと思われる集落跡を検出した。また、道路の東側からは、中世の集落及び居館跡を検出し、古墳時代から中世にかけて集落が位置を移しながら変遷していくことを確認することができた。

今年度は、道路から東側の調査を実施した。水路や耕地整備によって削平される部分に6ヵ所の調査区を設定した(第1図)。調査面積は約2,400㎡である。この結果、中世の居館跡や集落が、南側に伸びていっていることを確認することができた。



第1図 調査区位置図

第2節 調査の方法

1. 地区割

本府教育委員会では、発掘調査を実施する際、府域全体を統一した物差しで測れるように国土座標軸（第VI座標系）を使用し、独自の共通した地区割を設定している（第2図）。

第I区画は、大阪府が独自に設定している1万分の1地形図の地区割図をそのまま使用している。1区画が1万分の1の地形図1枚の範囲となる。区画の最南端を基点とし、縦軸AからO、横軸0から8で表示する。縦6km、横8kmになる。

第II区画は、第I区画を縦、横各4分割した計16の区画である。1区画は、2500分の1地形図1枚の範囲であり、南西端を1とし東へ進み、北東端を16とする平行式の区画である。縦1,500m、横2,000mの範囲になる。

第III区画は、第II区画を100m単位で区画する。縦15、横20の区画になる。北東端を基準に縦をAからOに、横を1から20と表示する。

第IV区画は、第III区画を10m単位で区画する。縦、横各10区画になる。北東端を基点とし、縦をaからj、横を1から10で表示する。

この他、第IV区画を5m単位に区画する第V区画、第IV区画を北東端を基点としてmm単位まで細分できる第VI区画があるが、今回の調査では第V、VI区画は使用していない。

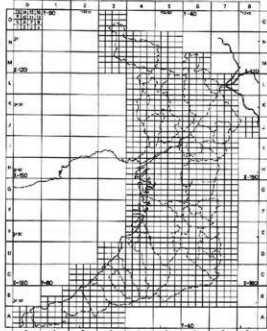
この区画の表示方法は、第I区画から順に記載していくが、今回の陶器南遺跡の調査では、第I区画はE5、第II区画は7になる。第III、IV区画については、本文及び図中に示す。

2. 遺構番号・遺物取り上げ・土色

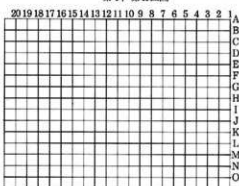
各調査区とも遺構番号については、検出した順に自動的に番号を付した。その後の整理の段階で、溝等の遺構の種類をそのまま遺構番号の前に付けた。復元した掘立柱建物は、現場での最終番号の続きで付けた。

遺物は、各区とも地区割に基づいて取り上げたが、同一の地区割が2枚以上の耕作地にまたがる場合は各耕作地ごとに別けて取り上げた。

本書に用いた土色は、『新版 標準土色帖 12版』（小山正忠・竹原秀雄編・著）に基づく。



第1. 第II区画



第III区画



第IV区画

第2図 地区割図

第2章 調査結果

調査区は南東から北西に伸びる丘陵の南西側斜面に立地する。現状は、水田あるいは畑地として利用されており、東から西に下がる細分された棚田となっている（第1図）。標高は1区西端の約68mから、6区の78mと比高差約10mを測る。

第1節 1区

1. 調査の概要

1区は幅約5m、長さ約60mの調査区である。調査区東端は、1996年度第4区につながる。現状は、東から西に向かって下がる4枚の水田である。便宜上、東より1段目から4段目の名称を付して調査した。標高は現状で、1段目71.31m、2段目70.91m、3段目69.79m、4段目68.67mを測る。比高差は現状で約2.6mを測る。また、西側2枚の耕作地は比高差が大きいため、各段ごとに別けて調査した（第5図）。

2. 層序

各水田面とも現耕作面以下、旧耕作面が4～5面確認できる。丘陵の谷側を盛土して、耕作地を造成している。現在の耕作面は、当初の耕作面から谷側を最高約70cm整地・盛土しており、斜面地を開発していく状況が確認できた。これらの層中からは古墳時代から近世の遺物が出土したが、全て二次堆積である。耕作面以下地山までは、約50cmほど斜面堆積土が続く。斜面堆積土からは、古墳時代から中世の遺物が若干出土する。地山は、にぶい黄褐色シルト、褐色砂まじりシルト、にぶい黄褐色シルトであり、10°程の傾斜角をもって西に下がっている。にぶい黄褐色シルトには、上面から約20cmほどマンガン（鉄分）が多量に沈着している（第4図）。

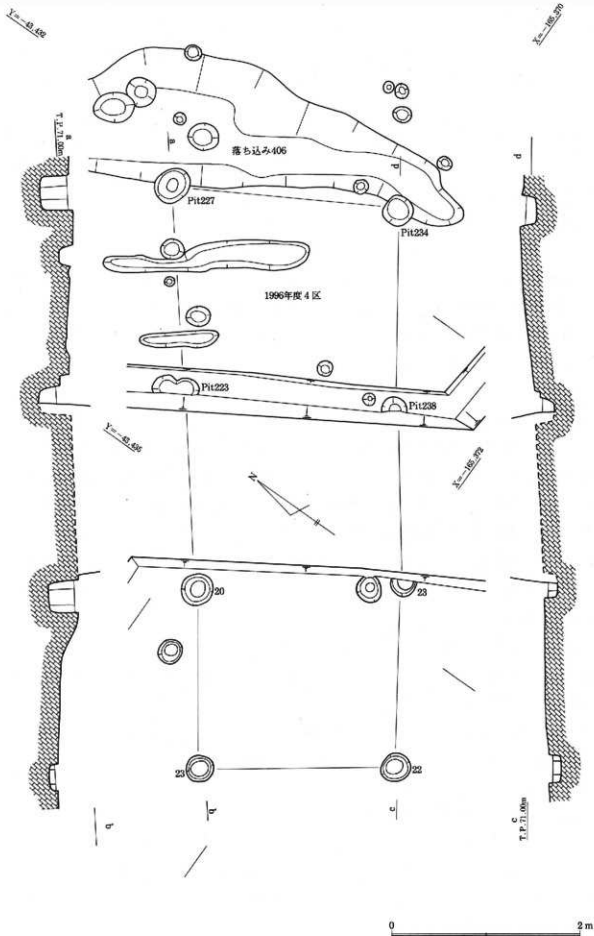
3. 遺構と遺物

1区からは、柱穴、掘立柱建物、谷を検出した（第5図）。柱穴は、D15-h 8以東から多く検出した。これ以西から柱穴は検出できなかった。そのうち、1996年度第4区にまたがって掘立柱建物75を1棟復元できた（第3図）。

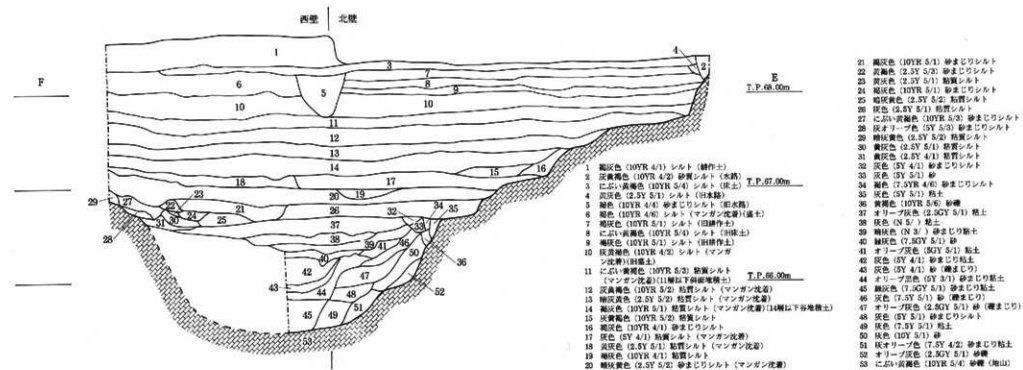
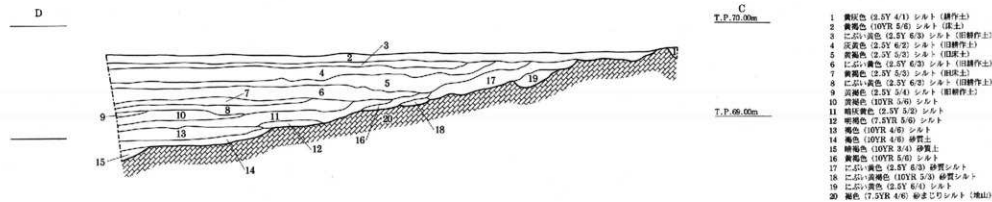
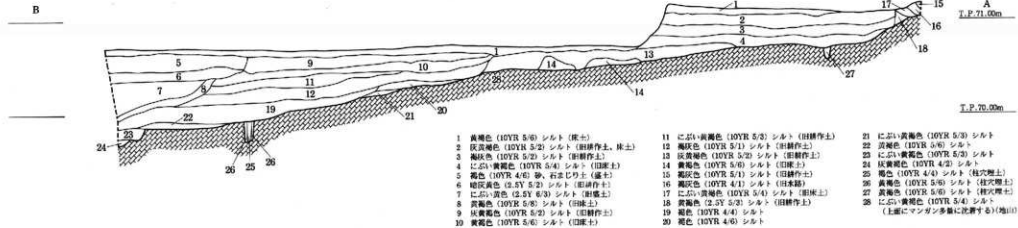
掘立柱建物75は、D15-g 4, h 4から検出した。1間×3間の建物である。柱間は約2mを測る。方位はN-60°-Wである。柱穴は直径約70cmから80cm、深さは40cmから80cmを測り、深さは一定していない。埋土は、にぶい黄褐色シルト、柱あたりは灰黄褐色シルトである（第3図）。時期は、柱穴73から第6図1の土師器小皿が出土し、また、1996年度調査pit227からは13世紀後半の瓦器が出土している。

掘立柱建物75の近くには、1996年調査の掘立柱建物401、棚列401、落ち込み406があるが、出土した遺物から10世紀末から11世紀初頭であり、今回検出した掘立柱建物とは、時期が3世紀ほどずれる。

4段目のD15-h 9から、ほぼ南から北に向かって埋没谷を検出した。西側の肩は、調査



第3図 掘立柱建物75平面図・断面図



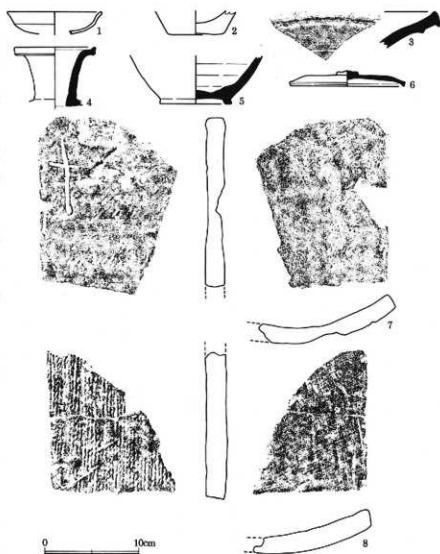
第4図 1区土層断面図 (縦1/100、横1/40)



第5图 1区平面图

区外のため確認できなかった。また、掘削深度が大きくなったため、谷底はトレンチによって確認した。谷は、約2mの深さを測るが、堆積状況から水が激しく流れていたのは、谷底から約1.2mの間のみと思われる。谷のすぐ西側には現在も水路があり、第1図を見るとその痕跡が明瞭に認められる。1997年度に調査した8区、及び後述する3区からもこの谷を検出している。

谷の堆積土から、第6図2から8の遺物が出土した。2は弥生時代中期の甕の底部である。本遺跡からは、1995年度の調査で縄文時代晩期の石鏝、弥生時代前期の石包丁が出土している。



第6図 1区出土遺物

弥生時代の遺物は本例で2例目である。2の土器は、上流から流されてきたものと考えられるが、現在の所この周辺には弥生時代の遺跡は確認されておらず、また、削平を受けているのか、本遺跡内からも弥生の遺構は検出できない。

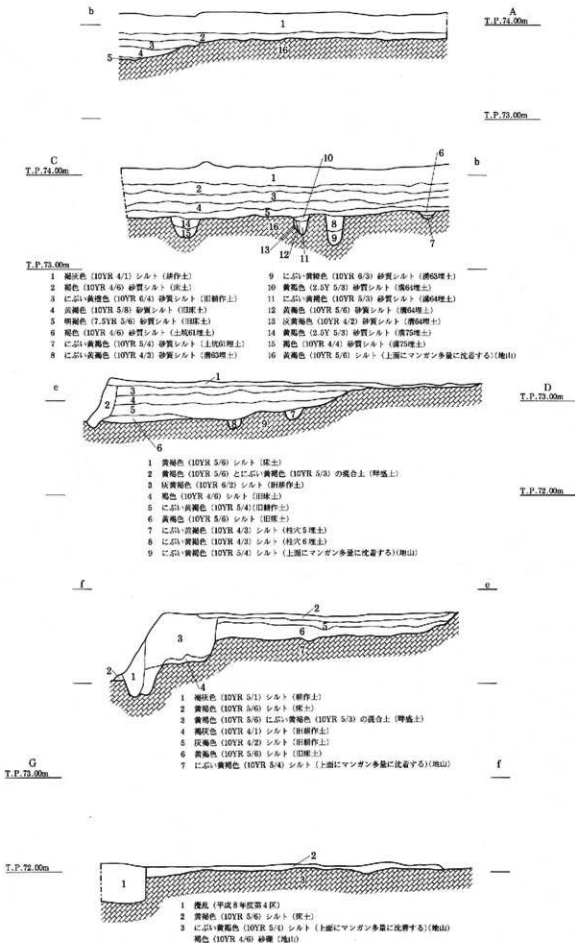
須恵器は奈良時代までのものが出土する。7、8は瓦であるが、7は、凹面に同心円たたき、凸面に格子目たたきを施している。

この谷の埋没時期については、1997年度8区の調査で中世の遺物が出土していることから、最終的な埋没時期は中世と思われる。

第2節 2区

1. 調査の概要

2区は幅約5m、長さ約76mの逆L字状の調査区である(第8図)。調査区西端は、1996年度第4区につながる。現状は、東から西に向かって下がる4枚の水田である。標高は現状で、1段目73.96m、2段目73.0m、3段目72.76m、4段目72.08mを測る。比高差は現状で約2.6mを測



第7図 2区土層断面図 (縦1/100、横1/40)



第8图 2区平面图

る。2区もまた便宜上東より1段目から4段目の名称を付して調査した。また、1段目と2段目の間に水路があったため、二分割して調査した(第8図)。調査区の西側には、耕作地1枚をはさんで、12世紀末から13世紀前半のカマドを持つ居館跡を検出した、1996年度3区があるが、その比高差は約1.3mもある。

2. 層序

1区と同様、各水田面とも現耕作面以下に旧耕作面が確認できる。造成方法も1区同様であるが、丘陵の頂上に近いめか整地・盛土の厚さも薄く、旧耕作面は1~2面しか確認できない。また、斜面堆積土は2区には確認できない。これらの層中からは古墳時代から近世の遺物が出土したが、1区と同様、全て二次堆積である。地山は、黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐色砂礫であり、各層とも上面から約20cmほどマンガン(鉄分)が多量に沈着している。地山は、東から西へ下がっているが、1区とは違い6つの段をもつ平坦面で構成される。これは2区は丘陵の頂上部近くにあるため、後世の耕作地造成の際に、土を多く谷側に押し出すため、削平を受けたものと考えられる(第7図)。

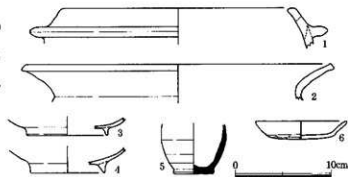
3. 遺構と遺物

1段目D14-8ライン以東、及び4段目D15-2ライン以西は、後世の大幅な削平のため遺構は検出できない。この間において、溝4条、土坑3基、柱穴多数を検出した。掘立柱建物は、復元できなかった。溝1は南東から北西方向であるが、他はほぼ南北方向の溝である(第8図)。

遺物は、溝1から、第7図3、4の遺物が出土した。3、4は黒色土器内黒A類である。期的には、10世紀後半から11世紀初頭と考えられ、1996年度調査の4区掘立柱建物401等との関連が考えられる。溝6から6の土師器小皿が出土した。期的には13世紀後半と考えられる。第7図1、2の土師質羽釜、土師質甕は、斜面堆積土中から出た。

柱穴からはほとんど遺物は出たしなかった。柱穴3からは期的には溝1と同時期と思われる5の須恵器壺が出土している。

しかしながら、全ての柱穴がこの時期のものとは考えられず、13世紀後半の柱穴もあると思われる。土坑からは遺物は出たしなかった。



第9図 2区出土遺物

第3節 3区

1. 調査の概要

3区は幅約3m、長さ約140mの調査区である。調査区北端は、1996年度4区につながる。現状は、5枚の水田である(第11図、第12図)。調査の便宜上、北より北1段目から北5段目の名称を付して調査した。標高は現状で、北1段目71.51m、北2段目72.14m、北3段目72.72m、北4段目73.31m、北5段目72.93mを測る。比高差は現状で約2.6mを測り、北4段目が高く、

これより南北にそれぞれ下がる。比高差は現状で北1段目との差約1.8m、北5段目との差0.4mを測る。北4段目と北5段目の間には水路があったため、この間で分割して調査した。

2. 層序

3区についても、各水田面とも現耕作面以下に旧耕作面が確認できる。しかしながら、1区のような大規模な造成はなく、旧耕作面は1面しか確認できない。これらの2次堆積土中からは古墳時代から近世の遺物が出土した。旧耕作面以下の層から、中世、古墳時代の遺物が出土するが、北3段目5層、及び中世の遺構のベースとなっている北4段目14、15層以外は、水田造成の際の盛土とも考えられ、明確な包含層とは言えない。

地山は、明黄褐色粘質シルト、黄褐色砂礫、明黄褐色粘質シルトである。2区と同様、高さは異なるがほぼ水平である（第11図、13図）。

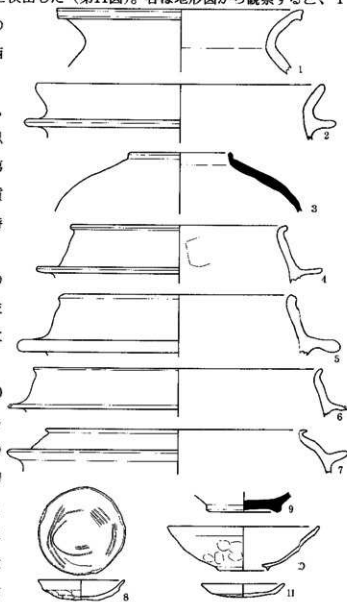
3. 遺構と遺物

北1段目から、1区4段目から続く谷を検出した（第11図）。谷は地形図から観察すると、1区4段目及び南側の耕作地、1区3段目の南側の耕作地へ通り、そこから方向を東西に変え、3区北1段目に達している。

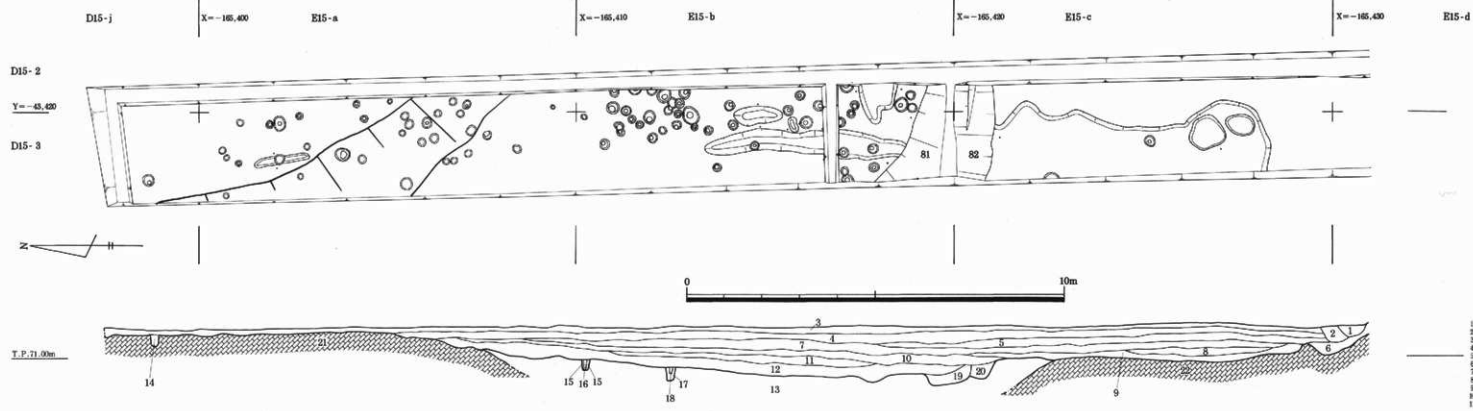
谷は、北1段目13層以下まだ深くなるが、13層が遺構の検出面であったため、これ以上は掘削しなかった。北1段目12層から第10図1の13世紀後半から14世紀初頭の瓦質甕が出土しているので、最終的にはこの時期に埋没したものと考えられる。

3区からは、この他に溝、土坑、多数の柱穴を検出した。柱穴のなかには1列に並ぶものがあるが、調査区の幅が狭く、掘立柱建物を復元することは出来なかった。

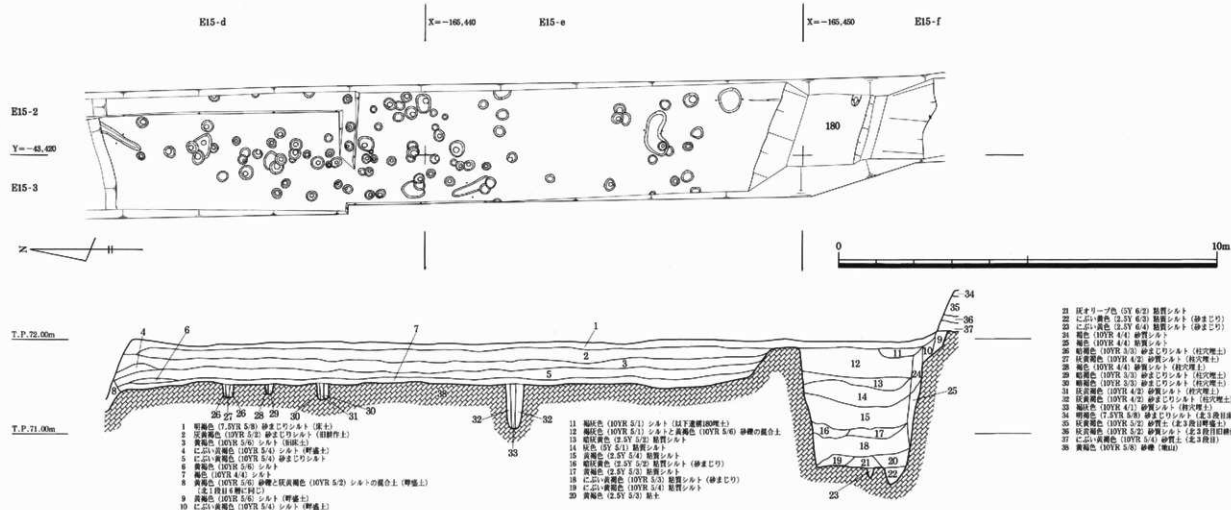
溝81から第10図2の鈿甕、溝82から第10図3の須恵器壺の奈良時代の遺物が出土している。溝268から4～7の14世紀初頭の土師羽釜、落ち込み190から8の14世紀初頭の瓦器椀、落ち込み191から9の白磁椀、10の13世紀後半の瓦器椀、土坑243から11の土師器皿が出土している。柱穴からは遺物はほとんど出土しなかったが、ほぼ13世紀後半から14世紀初頭と考えられる。



第10図 3区出土遺物

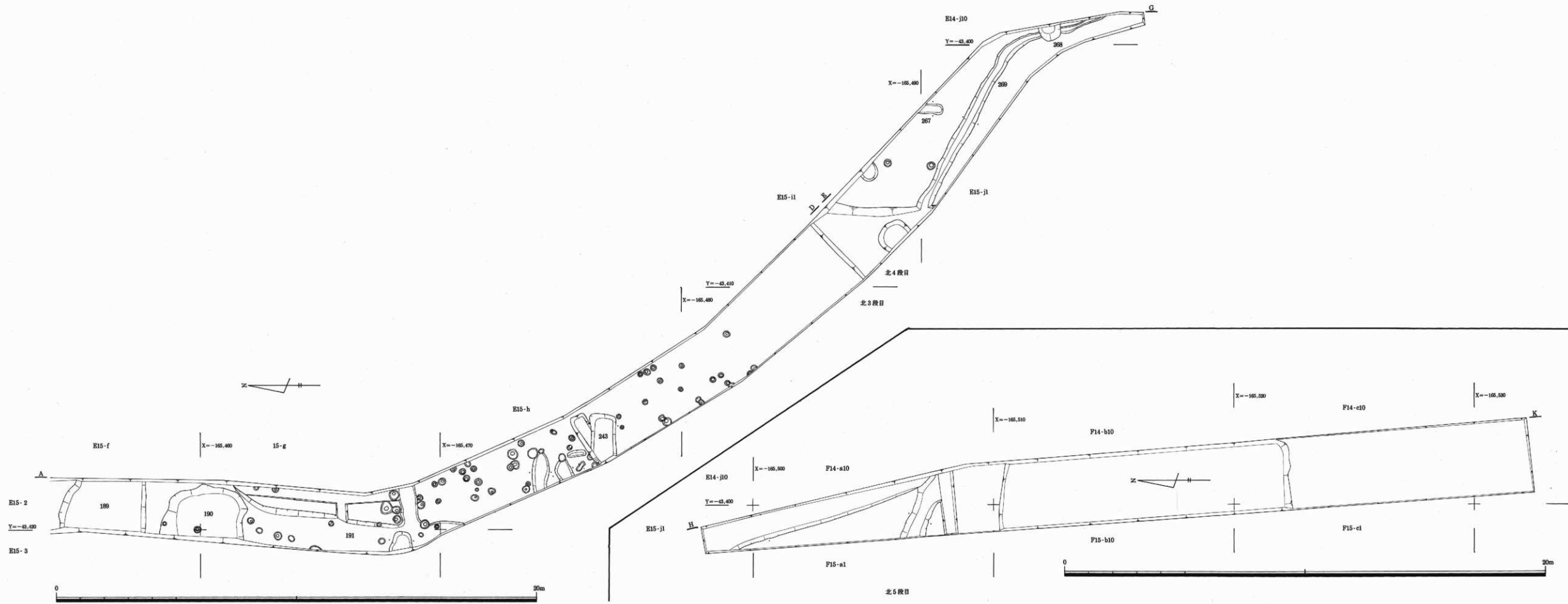


- 1 褐色土 (10YR 5/1) 砂質シルト (硬土)
- 2 灰褐色土 (10YR 5/2) シルト (硬土)
- 3 灰色土 (10YR 4/1) シルト (硬土)
- 4 灰色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 5 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 6 褐色土 (10YR 5/0) 砂質灰褐色土 (硬土)
- 7 灰色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 8 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 9 褐色土 (10YR 5/2) シルト (硬土)
- 10 褐色土 (10YR 5/0) 砂質シルト (硬土)
- 11 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 12 灰褐色土 (10YR 5/2) シルト (硬土)
- 13 灰褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 14 灰色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 15 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 16 褐色土 (10YR 5/0) 砂質シルト (硬土)
- 17 灰色土 (10YR 5/0) 砂質シルト (硬土)
- 18 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 19 褐色土 (10YR 5/0) 砂質シルト (硬土)
- 20 灰色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 21 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 22 褐色土 (10YR 5/0) 砂質 (硬土)

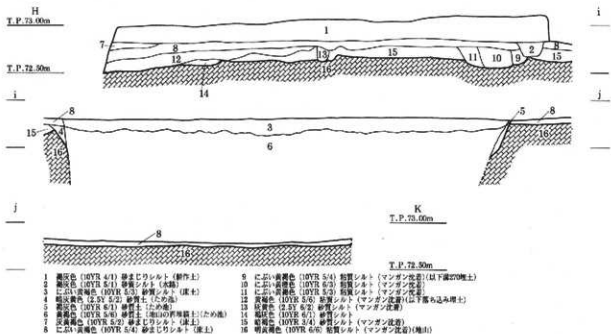
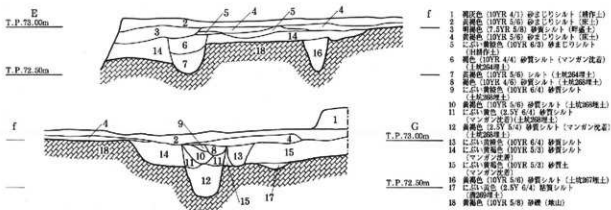
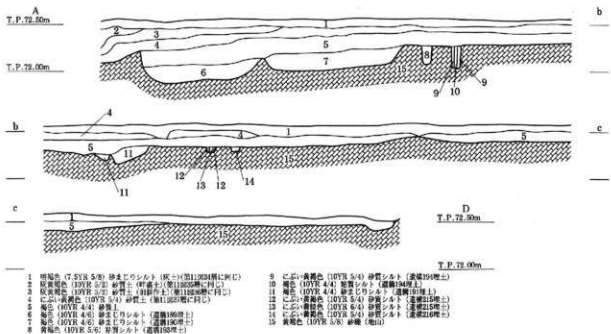


- 1 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 2 灰褐色土 (10YR 5/2) シルト (硬土)
- 3 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 4 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 5 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 6 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 7 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 8 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 9 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 10 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 11 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 12 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 13 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 14 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 15 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 16 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 17 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 18 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 19 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 20 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 21 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 22 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 23 灰褐色土 (10YR 5/2) シルト (硬土)
- 24 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 25 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 26 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 27 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 28 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 29 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 30 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 31 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 32 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)
- 33 褐色土 (10YR 5/1) シルト (硬土)
- 34 褐色土 (10YR 5/0) シルト (硬土)

第11図 3区北1段目、北2段目平面図・土層断面図(縦1/100、横1/40)



第12图 3区北3段目、北4段目、北5段目平面图



第13図 3区北3段目、北4段目、北5段目土層断面図 (縦1/100、横1/40)

第4節 4区

1. 調査の概要

4区は幅約5m、長さ約43mの逆L字状の調査区である。調査区北端は、幅約2mの道路をはさんで3区につながるが、4区のほうが1m高い。現状は、東から西に向かって下がっていく3枚の水田である。調査の便宜上、東より1段目から3段目の名称を付して調査した。標高は現状で、1段目75.26m、2段目74.85m、3段目74.65mを測る。比高差は現状で約0.6mを測る。また、2段目と3段目の間に水路があったため、二分割して調査した(第15図)。

2. 層序

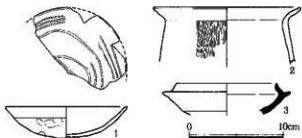
4区では、現耕作面以下に旧耕作面が確認できるのは1段目のみであり、2面旧耕作面が確認できる。これらの2次堆積土中からは古墳時代から近世の遺物が出土した。1段目、2段目落ち込み136以東までは耕作土を除去するとすぐに地山となる。第26層の褐色砂質シルトは、古墳時代後期の遺構落ち込み136のベースとなっていることから、古墳時代の包含層であると考えられる。

地山は、明黄褐色粘土である。上面から約20cmほどマンガン(鉄分)が多量に沈着している。1段目、2段目は、掘削した段階ではほぼ水平となり、3段目も高さは異なるが地山面は水平である(第15図)。

3. 遺構と遺物

4区からは、溝、土坑、多数の柱穴を検出した。柱穴のなかには1列に並ぶものがあるが、調査区の幅が狭く、掘立柱建物を復元することは出来なかった(第15図)。

溝1は、当初東西方向の溝であると考えていたが、3区へ向かう傾斜面とも考えられる。遺物は出土しなかった。柱穴93からは、第14図1の13世紀後半の瓦器碗が出土したが、他の柱穴からは遺物はほとんど出土しない。落ち込み136はこれらの柱穴のベースとなっている。第14図2の土師器甕、3の須恵器杯身が出土した。何れも時期的には6世紀後半である。



第14図 4区出土遺物

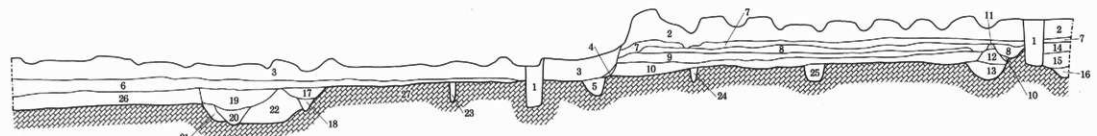
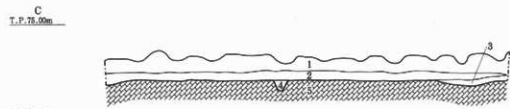
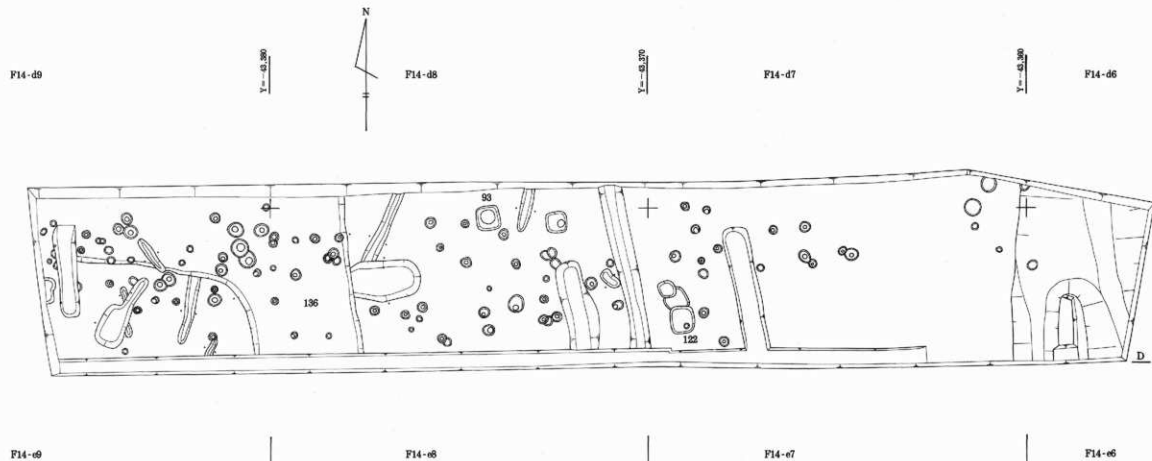
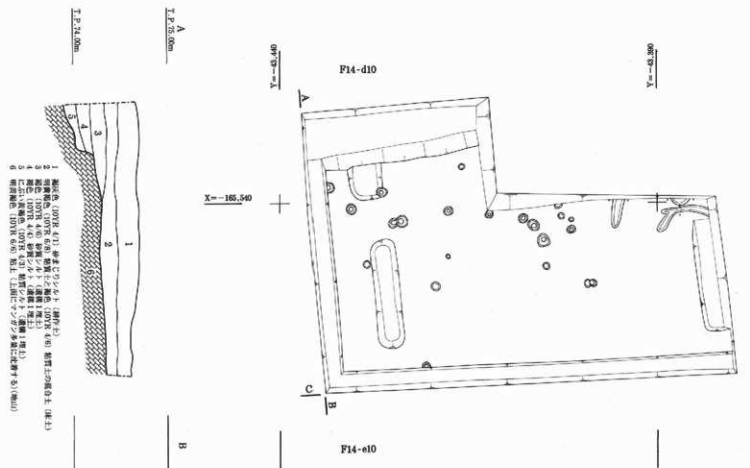
第5節 5区

1. 調査の概要

5区は幅約6m、長さ約43mの調査区である。後述する6区の西に位置する。現状は、1枚の水田である。標高は現状で76.91mを測る(第18図)。

2. 層序

5区は、現耕作面以下39層までの約60cmの間旧耕作土、床土が続く。これらの2次堆積土中からは古墳時代から近世の遺物が出土した。40層からは、古墳時代、中世の遺物が出土し、中世の



第15図 4区平面図・土層断面図 (縦1/100、横1/40)

包含層であると考えられる。

地山は、黄褐色砂質シルトである。上面から約20cmほどマンガン（鉄分）が多量に沈着している。遺構面は、ほぼ水平である（第18図）。

3. 遺構と遺物

E14-j 4、F14-a 4から掘立柱建物65を検出した（第17図）。この掘立柱建物は、1995年度6区から検出した2間×5間の掘立柱建物、1996年度第3調査区から検出された2間×6間の掘立柱建物と酷似している。

主軸はほぼ南北方向で、桁行き5間を測る。梁行きは、西側が調査区外になるため不明であるが、既往の調査結果から2間であると思われる。規模は、桁行き11.1m、梁行きは2間と考えれば4.2mを測る。柱間は、桁行きが柱穴23から24間が2.3m、それ以外は2.2mを測る。梁行きは2.1mである。

北側2間×2間は総柱構造である。南側についても梁行きは若干ずれるが、柱穴29をこの建物と考えると南側も1間×2間の総柱構造となる。

柱穴は直径30～35cmの円形あるいは隅丸方形を呈する。深さは一定ではない。全ての柱穴から柱あたりを確認した。埋土は、堀方は褐色（10YR 4/4）シルト、柱あたりは褐色（10YR 4/6）シルトである。

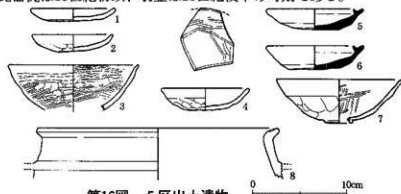
柱穴34、64、41、42は、1996年度第3調査区の掘立柱建物の構造から考えて、庇柱であると考えられる。今回は全ての庇柱を検出することはできなかったが、1996年度の調査結果から、この建物も4面庇をもつ建物であったと考えられる。

庇柱は、直径15cmから30cm、深さ10cmを測る。柱あたりは柱穴34、42から検出した。埋土は、柱穴34は堀方が褐色（10YR 4/4）シルト、柱あたりは褐色（10YR 4/6）シルト、柱穴42は、堀方が褐色（10YR 4/4）シルト、柱あたりはにぶい黄褐色（10YR 5/4）シルト、柱穴35はにぶい黄褐色（10YR 5/4）シルト、柱穴64は黄褐色（10YR 5/6）シルトである。

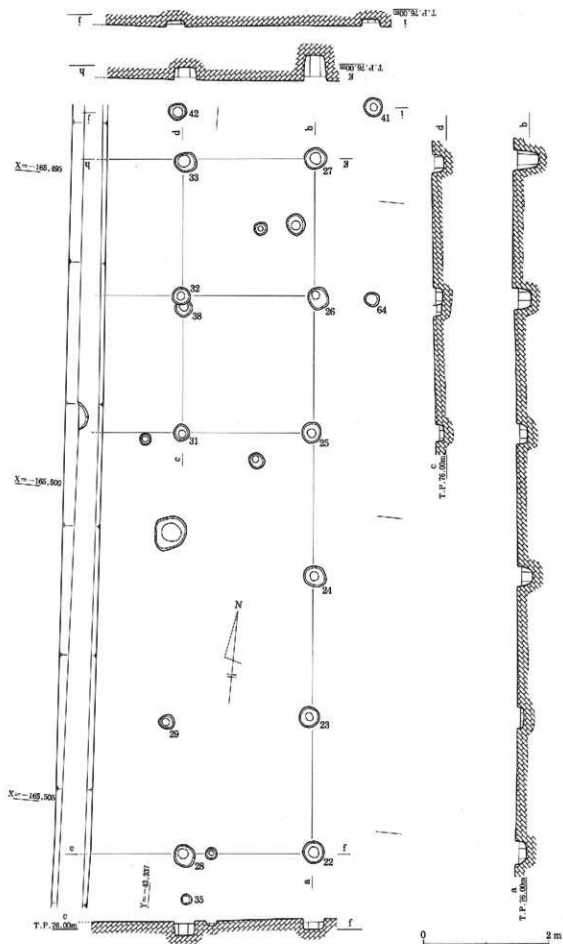
柱穴24からは、第16図1、2の土師質小皿、3の瓦器椀が出土し、柱穴25からは4の瓦器小皿が出土している。時期的には3の瓦器椀から13世紀初頭の建物と考えられる。

第16図5、6の7世紀前半の須恵器杯身は、土坑63から出土した。7の瓦器椀、8は土師質羽釜は何れも40層から出土した。瓦器椀は13世紀初頭、羽釜は13世紀後半の時期である。

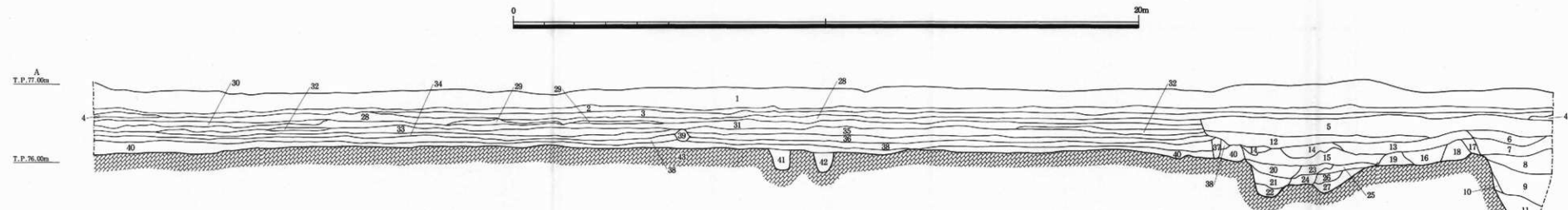
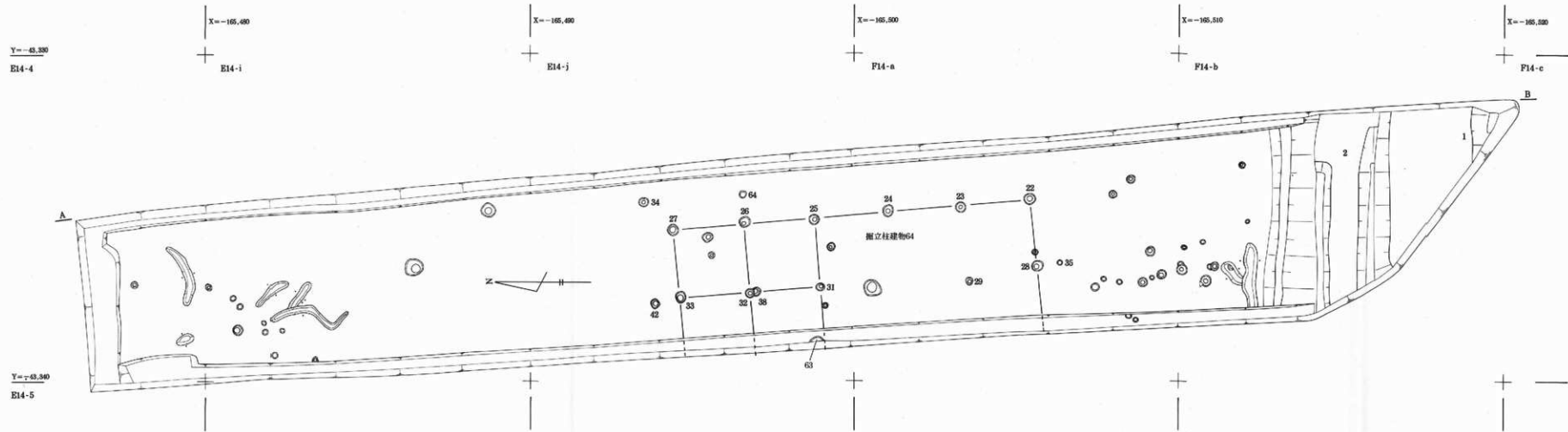
掘立柱建物64以外にも柱穴を検出したが、掘立柱建物を復元することはできなかった。溝1、2は、上面から切り込まれており、近世の水路ではないかと思われる。この溝は6区からも検出した（第18図）。



第16図 5区出土遺物



第17图 掘立柱建物64平面图・断面图



- | | | | | |
|---|----------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗灰黄色 (2.5Y 5/1) 砂質シルト (目録作土) | 11 灰色 (7.5Y 6/1) 粘土 | 21 にごい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土 | 31 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質シルト (目録作土) | 41 褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト (遺構2層土) |
| 2 褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト (目録) | 12 黄褐色 (2.5Y 5/2) 粘質シルト (以下層2層土) | 22 にごい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土 | 32 にごい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト (目録土) | 42 褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト (遺構3層土) |
| 3 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト (目録土) | 13 にごい黄色 (2.5Y 6/4) 粘質シルト | 23 にごい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土 | 33 黄灰色 (2.5Y 6/1) 砂質シルト (新録作土) | 43 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト (遺4) |
| 4 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質シルト (目録作土) | 14 褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト | 24 灰白色 (2.5Y 6/2) 粘土 | 34 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト (目録土) | |
| 5 にごい黄褐色 (10YR 6/4) シルトと黄褐色 (2.5Y 5/3) シルトの混合土 (粘土) | 15 黄褐色 (2.5Y 5/4) 粘質シルト | 25 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質シルト | 35 黄褐色 (2.5Y 5/2) 砂質シルト (目録作土) | |
| 6 黄褐色 (2.5Y 5/3) シルトと灰白色 (7.5Y 5/2) シルトの混合土 (粘土) | 16 黄褐色 (2.5Y 6/3) 粘質シルト | 26 黄褐色 (2.5Y 5/3) 粘質シルト | 36 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト (目録土) | |
| 7 にごい黄褐色 (10YR 5/6) 粘質シルト (以下層1層土) | 17 黄褐色 (2.5Y 5/6) 粘質シルト | 27 褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト | 37 にごい黄褐色 (10YR 5/3) 砂質シルト | |
| 8 褐色 (10YR 4/6) 粘質シルト | 18 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質シルト | 28 灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質シルト (目録作土) | 38 灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質シルト (目録作土) | |
| 9 黄褐色 (2.5Y 5/3) 粘質シルト | 19 にごい黄褐色 (10YR 6/4) 粘質シルト | 29 にごい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質シルト (目録土) | 39 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質シルト (新録) | |
| 10 にごい黄褐色 (10YR 6/3) 粘質シルト | 20 にごい黄褐色 (10YR 6/3) 粘土 | 30 褐色 (10YR 4/6) 砂質シルト (目録土) | 40 黄褐色 (10YR 3/4) 砂質シルト (マンガン含有に注意) | |

第18図 5区平面図・土層断面図 (縦1/100、横1/40)

第6節 6区

1. 調査の概要

6区は5区の東側に位置し、今回の調査では面積が一番広い調査区である。一番幅約25m、長さ約50m、面積1,250㎡を測る。現状は、1枚の耕作地である。標高も今回の調査で一番高く、現状で77.76mを測る。掘削土の仮置き場所が無かったため、6区南、6区北の2回に別けて調査した(第20図)。

2. 層序

6区は、現耕作面以下地山まで旧耕作土、旧床土、耕作地を嵩上げするための盛土が続く。これらの2次堆積土中からは古墳時代から近世の遺物が出土した。盛土は西側にいくほど厚く、現在の耕作地になるまで約1mほど盛土を繰り返している。特に西壁17層は、1996年度調査第4調査区でも確認されたように、盛土の一回の単位が分かる。あるいは土囊を積んでいたとも考えられる。このような盛土の単位は北壁では明確でない。調査区の中央部でも断面を残したが、この断面でも明確な盛土の単位は確認できなかった。西壁は、現在の耕作地を画する畦近くに設定したものであり、この盛土がなされたときも畦を同じところに造ったと考えるならば、畦の部分にのみ土囊を積み、その中に土を入れて耕作地を造成したものと考えられる(第21図)。

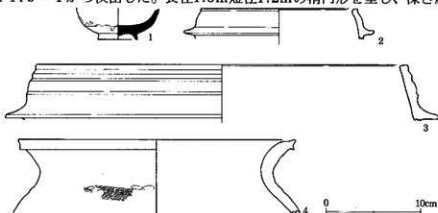
地山は、明褐色砂質シルトである。上面から約20cmほどマンガン(鉄分)が多量に沈着している。遺構面は、東側が高く、西側にいくほど低くなるが、良く観察すると5つの段をもつ平坦面で構成される。この段は、この地における耕作地開発の当初の姿を示すものと思われる。

3. 遺構と遺物

6区は、今回の調査のなかで、標高が一番高いこともあり、耕作地造成の際の削平の度合いが強かったためか思った以上には遺構は検出できなかった(第20図)。

溝、土坑、井戸、柱穴を検出した。掘立柱建物は、復元することはできなかった。溝51はE14-h・i・j 2、F14-b 2から検出した。第19図2の14世紀中頃の瓦質羽釜を検出した。土坑6はF14b-1から検出した。3の15世紀初頭の瓦質羽釜が出土した。溝7は、F14-b 1、F14-b 2から検出した。4の13世紀後半の瓦質甕から今回は図化していないが15世紀の遺物が出土している。井戸14は、F14b-1から検出した。長径1.5m短径1.2mの楕円形を呈し、深さ約0.8mを測る。14世紀代の遺物が出土している。

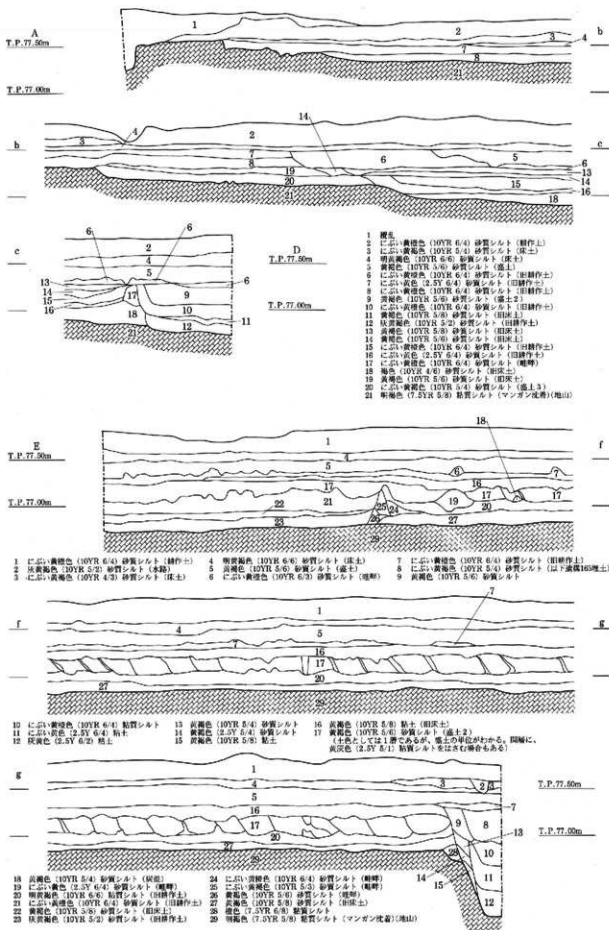
地山の直上層から、第19図1の17世紀初頭の絵唐津の碗が出土しており、すくなくともこの時期以降に耕地化が始まったと思われる。



第19図 6区出土遺物



第20图 6区平面图



第21図 6区土層断面図(縦1/100、横1/40)

第4章 まとめ

今回は、1995年度、1996年度の調査地の主として南側を調査し、前記両調査の成果とほぼ同様の調査成果を得ることができた。また、今回新たに加わった新発見も述べてまとめたい。

1. 中世の集落

前2回の調査では、陶荒田神社から北に伸びる道路の東側では、道路沿いの丘陵のより低い部分には奈良時代後半、丘陵の高い部分には平安時代末から鎌倉時代前期、その中間部分には平安時代中頃の遺構を検出していた。この結果、当該地における開発は、時代が下るに従ったより高所に及んでいくということが理解されていた。また14、15世紀については、遺物は出土していたが、確認されていなかった。

今回の調査では、丘陵の中間部分である1区の東側、3区から13世紀後半から14世紀にかけての遺構を検出した。また、6区から14世紀から15世紀の遺構を検出した。

6区については削平を受けているため、この時期以前の遺構については不明であるが、これまでの調査結果から導き出された、時期が下るにつけて集落がより高所に営まれるという事実に反しない。

しかしながら、これまで平安時代中頃の遺構しか検出していなかった丘陵の中間部分から13世紀後半から14世紀にかけての遺構を検出した。これは、鎌倉時代前期に集落が一旦高地部分まで上がった後に、再度丘陵を下ったところに再構築されたことを示していると考えられる。

今回調査した3区は、これまでの調査地の南側に位置する。また、平安時代中頃の遺構は確認することはできなかった。このことから、平安時代中頃の集落は、3区から北側に営まれ、当時はこの地域まで集落の範囲が伸びてきていなかったと考えられ、13世紀後半から14世紀になってから集落がこの地域に新たに営まれるのではないかと考えられる。

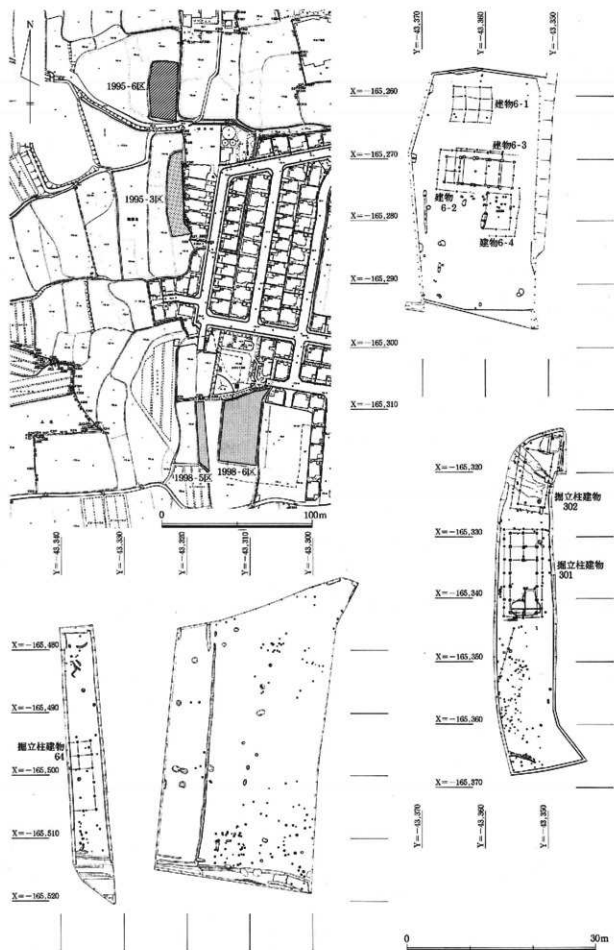
そして、陶器南遺跡における古墳時代後期から営まれていた集落は、少なくとも17世紀初頭には、耕作地として造成されたと考えられる。

2. 中世居館に付いて

1995年度6区から2間×5間、1996年度第3調査区から2間×6間の、何れも12世紀末から13世紀前半の掘立柱建物が出された。これらの建物は中世の居館として理解され、陶器南遺跡が当時の拠点集落であったと考えられている。

今回の調査では、これらの調査区から南に約200m離れた5区から2間×5間の底を持つ掘立柱建物を出した。時期は、出土した遺物から13世紀初頭と考えられる。この建物は、これらの建物とその規模がほぼ同じであること、時期が一致すること、遺構の検出面についてもその差が約1mしかないことから、一連の居館群として理解することが可能である。

この居館群に伴う集落は、これまで検出されていない。3区から検出した柱穴群は、時期的には若干新しい。しかし、将来この近くから居館に伴う集落が発見されることが期待できる。



第22図 中世居館位置図

報 告 書 抄 録

ふりがな		とうきみなみいせき はっくつちょうさがいよう						
書 名		陶器南遺跡発掘調査概要・VI						
副 書 名		府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査						
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名		竹原伸次						
編 集 機 関		大阪府教育委員会 文化財保護課						
所 在 地		〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(6941)0351						
発 行 年 月 日		1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	おおいしとうきまた 堺市陶器北 上之	272019		34° 30' 27"	135° 31' 36"	1998年6月10日 ～ 1999年3月31日	2,400㎡	府営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
陶器南遺跡	集落遺跡	中世	掘立柱建物 溝、土坑		須恵器、土師器 瓦器			

図 版



調査区遠景（西から）



航空写真(北から)



全景(西から)



1、2 段目全景（東から）



1、2 段目土層断面（南西から）



3段目全景(南から)



3段目土層断面(南東から)



4 段目全景 (東から)



4 段目土層断面 (南東から)



1 段目航空写真 (東から)



2、3、4 段目航空写真 (北から)



1 段目全景 (西から)



1 段目土層断面 (南西から)



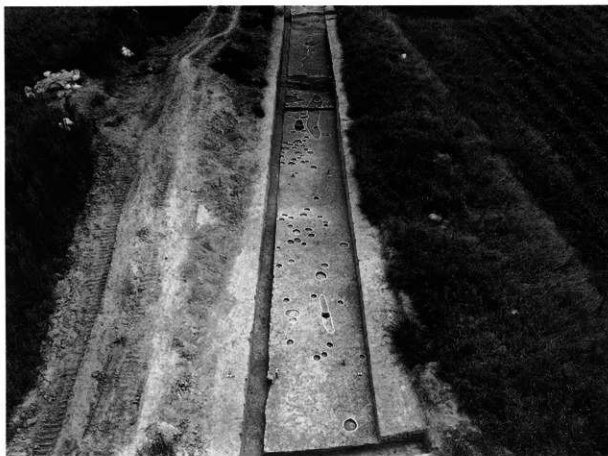
2、3、4 段目全景 (西から)



2、3、4 段目土層断面 (南東から)



航空写真(南から)



北1段目全景(北から)



北 2 段目全景 (南から)



北 3 段目全景 (東から)



北3段目全景（東から）



北3、4、5段目全景（北から）



北 1 段目土層断面 (北西から)



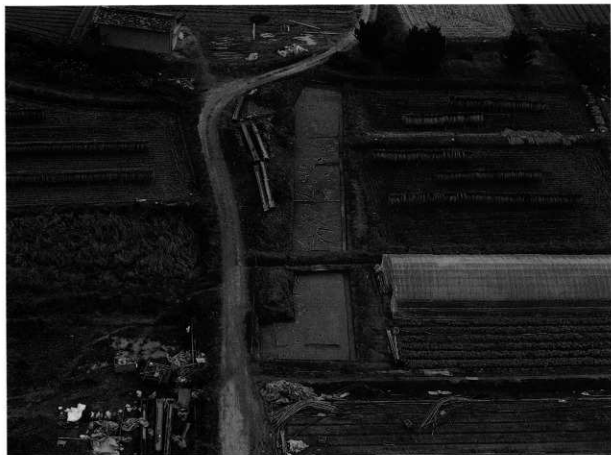
北 2 段目土層断面 (南西から)



北 3 段目土層断面 (北西から)



北 4 段目土層断面 (北西から)



航空写真（西から）



1、2 段目土層断面（北西から）



5区、6区北航空写真(南から)



掘立柱建物64(南から)



溝 1、2 (南から)



土層断面 (南東から)



全景 (南から)



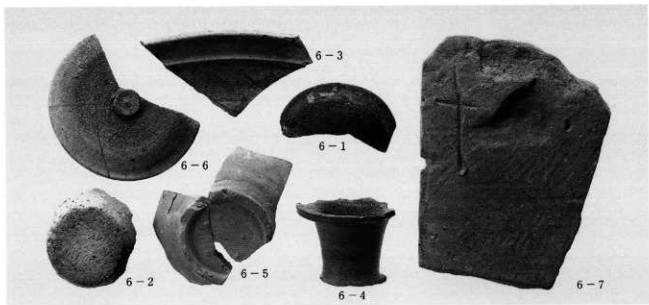
土層断面 (北東から)



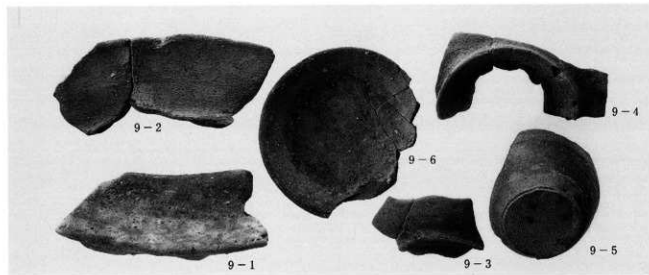
航空写真 (西から)



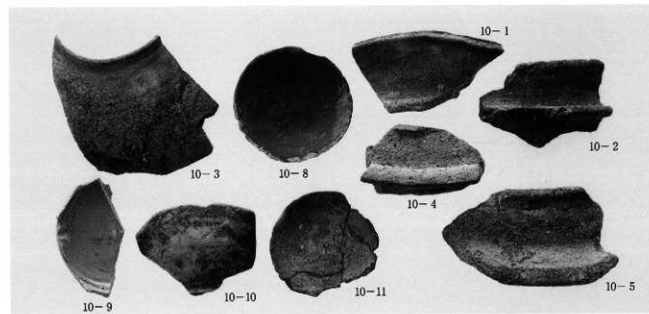
土層断面 (北東から)



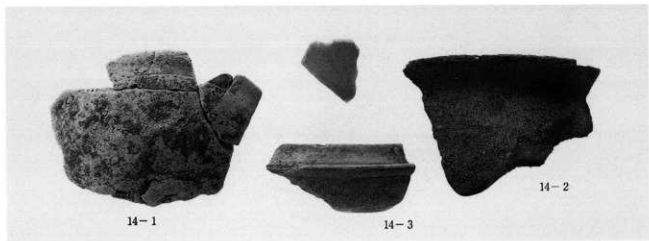
1 区



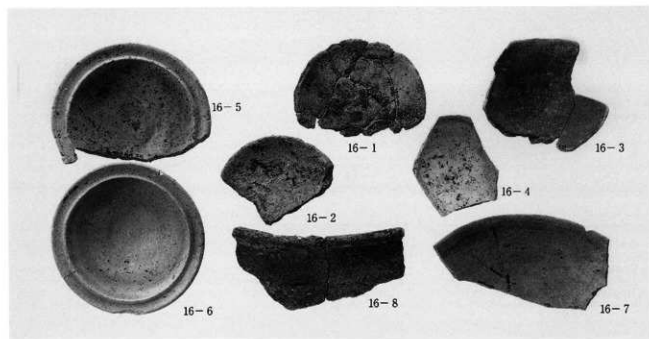
2 区



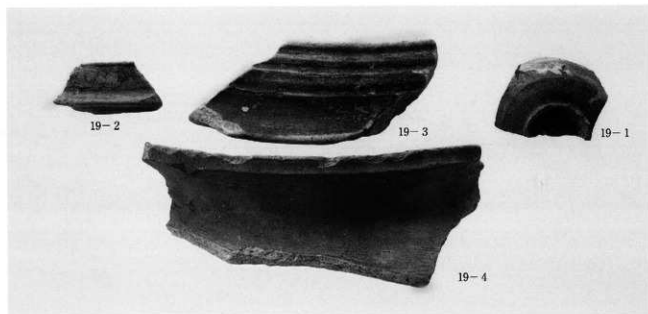
3 区



4 区



5 区



6 区

